

犬を焼く

塚田源秀（★もとひで）

居間の障子をそっと開けてみる。足音をたてずに廊下にて縁側の方へそろりそろりと足を運ぶ。気づかれないように背を丸めてガラス戸越しに裏前栽を眺めてみる。昔、祖父が鯉を飼っていたようだが、今は池の水が枯れてしまつて高台には躑躅と松を中心に鬱蒼と茂り、垣根はぐるっと柘植の木で被われていて、すり鉢状になっている。ところどころ雪も残っている。あつ、いた。今年初めて見るキツネだ。中腹のところに、白褐色のキツネがいて、こちらの方を見ているようだ。横に灯ろうがあつて、色合いから対の置物のように見えた。まだ警戒はしていないようだ。手前の方に目をやると子ぎつねが縁の下から出てきた。続いて母親らしきキツネがその後ろから出てきた。昨日まで雪交じりの寒さであつた。今朝も寒くはあるのだが、太陽もでて平たい庭石にも淡い光が注ぎ、それにじゃれるように子ぎつねは遊ぶ。子にしても母親にしても茶で毛並みもよく太陽の下で黄金のように映えていた。すると白褐色のキツネは母親の姉妹か、それとも母親の母、つまりおばあちゃんなのか、そんなことを考えていると、後ろのほうから、サツキが何してるんだという感じの吠え方をしたものだから、白キツネと私の目がバチツと合つて、母キツネもこちらに気づいて、三匹はすつと縁の下に入つていった。

サツキは廊下の向こう側から首を横にじつとこちらを見ている。サツキは一昨年、近くの神社に沿う川で溺れていた。たまたま初音（雌のトイプードル）の散歩の時に出くわし、当然助けるべく拾い上げた雌の生後二カ月くらいの野良の仔犬だった。当初はかかりつけの動物病院や家の玄関先に里親募集の掲示をしたのだが、その後サツキが大病したこともあつて、仕方なく家で飼うことにした。サツキという名は、初音の他、家の床下で生まれた地域猫三匹が棲みついていて、順番からいうと五番目にあたり、拾い上げたのが五月と

いうこともあって、サツキにした。

ケージの柵に手をつけて、じっと上目遣いでこちらを見つめている。近づいて頭をなでて、サツキ、ごめん。キツネの臭い、気になるやろ。我慢せんとな、と声をかけてやる。今年のキツネがやってきたのは一カ月前くらいだろうか。夜行性ということもあって姿を見ることがなく、今朝見るのが初めてであった。ちょうど居間の床下ぐらいに猫とは違うゴタゴタした音がしていて、そのうち甲高いギャツという鳴き声が出た。おそらく出産の時であったのだろう。十数年来たり来なかったりするが、この二、三年は来ているような。最近家の周りの空き地や田畑、雑木林が失われて、新興住宅が侵食するようにどんどん増えていって安心して棲めるのはこしかならないかと思っているのかもしれない。

ここ十年は、初音だけを飼っていただけであったが、やがて地域猫が棲みつき、サツキを拾い上げ、それにも増して野生のキツネが床下と裏前栽で子育てに励み、さすがにそのあとに番(★つが)いらしい二匹のタヌキがやってきたのは驚いた。なにかの文献に載っていたのだが、どうもタヌキは自分で巣穴を掘ることができず、キツネが掘った巣穴の後をよく利用するようだ。ああ、嫌だいやだ。餌やり、散歩、糞の始末、トリミング。もちろん具合が悪くなったら動物病院と世話もかかるが費用もかさむ。そもそも初音だって生前に母がペットショップで買ってきた犬なのだ。

私は脱サラをして自宅でコーヒー豆の焙煎を中心に細々と珈琲屋をやっている。屋号も私の増田の苗字をカタカナにマスタ珈琲とした。洒落た名前だところかむず痒く、名は体を表すではないが、ありのままの姿でいいと思った。古くて大きいだけの古民家だが、昨今和の雰囲気が見直されているようで、玄関から台所、座敷を修繕して古民家カフェとして数年前に開業した。今日は火曜日で定休日。ゆっくり休みたいところだが、動物たちには関係はない。一泊どころか半日も出かけられない。こんな仕事だから、なんとか動物た

ちの世話ができるのだ。

朝起きて、いつもは玄関先で待っている四匹の猫の餌やりである。今朝はキツネのこともあって少し遅れた。猫三匹は床下で生まれた雌（生まれてすぐ母猫はどこかへ行ってしまう）で、一匹はどこかの雄である。店の玄関先あたりで雄同士の喧嘩をよく目にする。勝ったものだけが、家のテリトリーに入れるようだ。もちろん三匹の雌猫に好かれることが第一条件のようで、勝った勇ましい雄猫でも、三匹に嫌われたらそのうちどこかへ去ってしまう。猫たちにもいろいろな決まり事があるようだ。今は床下にキツネ親子が棲家として入ってきたものだから、猫たちもどこかそわそわして落ち着かない様子である。夜中、キツネと猫のお互いの威嚇している鳴き声がたまに聞こえるから、床下での領土の奪い合いが続いているようである。おそらく子ぎつねの巣立ちまで、猫たちは、狭いテリトリーで生きていかなければいけないのだ。ともかくにも家の床下は棲家に最適な場所であるようだ。以前お店の改修工事で一部床下をめくった折に、真っ白な美しいキツネのミイラが二体見つかったことがあった。全く腐敗せずに原形のまま目までもしっかり残っていて、業者の人も驚いていた様子で、ゴミとして捨てるのを躊躇していたのを覚えている。ミイラになった原因はわからないが、乾燥を含め風通しも良かったのだろう。

猫の餌やりの次は犬たちの散歩と餌やりである。初音とサツキは相性が悪いこともあって、離して飼っており、もちろん散歩も別である。二匹を近づけるとお互い吠えるのだが、とくに性格の穏やかな初音が牙をむき出しで怒っている様を見ていると、愛されていると自覚している分、その嫉妬が大きいのもかもしれない。または相性というより野良と飼い犬の血筋の違いがあるのかもしれない。二匹を交互に見ていると可愛らしさの質が違って見えるように思えてくる。初音は愛玩犬としての作られたかわいらしきで、サツキはどこか愛おしく手を差し伸べてあげたい気持ちが募ってくる。そんなこんなで一日の多くの時間や想いを動物たちに費やしていくわけだが、私に扶養する妻や子供もない分、こういうこ

とになってしまったのかという気さえする。家の周囲の縁側の下を柵か網などで囲んでしまえばキツネやタヌキの野生動物や猫にしても防げるのに、いざやろうとしたら手を出せない自分がいて、ホームセンターの害獣網の売り場で何度ためらったことか。

サツキを連れて、北へ向かう。家の周りには新興住宅が増え景観が一変する。当初は窮屈な感じもしたが、時が経てば不思議と馴染んで何の違和感もなくなっていく。新しい建物でありながら、まるで昔からあったような佇まいで、前に何があったか忘れてしまうくらいだ。

住宅街を抜けると一面に田畑が広がり、自宅から見えなくなってしまった山々の稜線を眺めることができた。今朝はいるかどうか周囲を見渡す。サツキを拾い上げた神社の方へ眼をやる。鎮守の森とまではいかないが、鬱蒼と茂っている大きな竹やぶがあった沿道には木々が覆いかぶさっている。ここが野良犬たちの棲家である。車一台通れるかどうかの沿道に軽自動車が停まっっていて、運転席からおばさんが降りてきた。何か手にしている。おそらく餌である。道端に餌を置いたらそそくさと運転席に戻って車はすぐその場所を離れた。すると竹やぶから川を飛び越えて茶と白の成犬がでてきた。さらに二頭の茶の成犬も加わって、四頭で食べている。散歩の道中、二、三餌やりする人たちを見かける。今のおばさんもその一人だが、別な場所では大型トラックの運転席からパンらしきものを放り投げている場面を見かける。犬たちも来る時間がわかるのか、トラックが近づくと、どこからともなく田畑を駆け抜けて運転席を見上げる。こっちから見えるのは、放り投げる腕だけである。餌付けがよくないのはわかっているが、そんな私もたまにサツキや初音の餌をポケットに忍び込ませ、周囲を窺いながら田畑の根際にやることもある。

向こうの餌を食べ終わったのか、こっちの方に二頭が警戒しながら寄ってきて吠えている。今日は無いよと片手を横に振りつづける。諦めたのか後ろを振り向いた。この二頭もサツキそっくりの形姿である。口の周りが黒くどこかタヌキ顔のようで、尻尾はふさふさ

でキツネのようである。サツキを見下ろしながら、ふっと息をつく。

ここ数年、野良犬がいたりいなかったりで、これから増えそうな気配である。大体は数頭の群れでいるらしく、他所の群れと相まみれることなくテリトリーを決めているようでもある。とにもかくにも雄と雌がいれば子は生まれ続けるのである。私がサツキを拾い上げた年、他に二匹の仔犬も拾い上げた。たまたま里親が見つかったが、その前後だったか、神社の方から続くちようど家の前の川で腐乱した仔犬を見つけた。おそらくサツキの姉妹に違いない。藻に何日も執着するかのごとく絡みついでいて、「どうして助けてくれなかったの」と声なき声を聞かされているように感じた。

「さあ、行こうか」と声を掛けてあげる。今でもまともに散歩ができないサツキ、たまに私が急いているときやイライラしているとき、真っすぐ走るくらいしろよと蹴りを入れたくなる。今日は、北へ行こうと真っすぐ歩きはじめてリードがぴんと張った。

お客の中に、保護犬や保護猫に関心ある人たちが増えた。これには理由があった。野良の仔犬を拾い上げ更には右大動脈遺残という大手術が必要で多額の費用を掛けて育てている珈琲屋の店主がいるということ。地方紙の記者が耳にしたようで、一面の大見出しで載った経緯があったからだ。それ以降、コーヒーを淹れながらそつとお客の会話に耳をすますと、保護犬や保護猫のことをよく耳にすることがある。とくに子に手がかからなくなつた四十から五十代の女性が多いように思う。今来られた女性客もそうだ。水を持っていくと、中腰で窓を見ながら「あれ、サツキちゃんは」と顔をこちらに向けた。彼女は一人できたり友達ときたりする。どうやら彼女のお姉さんが犬の保護活動をされているとかで、何頭かの保護犬を世話しているという。

「家の中にいます。うるさいという苦情があったもので……」

「誰から、です?」

「新興住宅の誰かと聞いてはいるんですが、おそらくお隣じゃないかと。苦情が市の方にあったようで、市の環境課の人たちが来られて」

「サツキちゃんを見に来たんですが、そうだったんですか」

「残念ですが、そういうことで」

窓越しに隣の一軒を見上げ、「外に出しているといっても天気の良い一時で、たまに吠えるぐらいなんですけどね」と愚痴をこぼしてしまった。川を隔てたその新しい家は、隣の自治会の組ということもあり、挨拶どころか、ほとんど姿を見かけたこともない。細い川を境にしても差し迫るような相手の壁ができてしまったことで、遠景にあった山々が遮られ、南からの日光がほとんど入ってこなくなってしまった。

「新しい人たちが住まわれると、なにかと煩わしさもありますね」

と言いつつ、肩をすくめた。そして彼女は思いついたかのように、トートバッグから姉がやっている保護活動のチラシを取り出して、置いてもらえないかと頭を下げた。

「もちろん」とチラシを受け取って、カウンターに置いた。但し啓蒙活動することは一切やらない。一定の期間が過ぎたらチラシは捨てることにしている。

店の営業を終え、動物たちの世話をし、近くのスーパーで二、三日分のお惣菜を買って簡単な夕食をとる。これがほぼ夕方から夜にかけての私の習慣である。猫たちも食事を終えて、床下か、どこかの家の敷地にお邪魔しているのか、キツネも真下にいるのか、どこかに餌を探して出掛けているのか、いつものことながら気にかかる。臭いにしてもそうだ。雑食性ということもあり、おそらく動物の死骸なども床下に引きずり込んでいるのだろう。特に子ぎつねが少し育ったぐらいが一番きつい。そろそろ縁側のまわり、というより私の想いに柵や網をしないと自分がだめになってしまうのではないかと、ふと心をよぎる瞬間がある。動物の種類に違いはあれども、彼ら彼女らにはそれを超えての、ここは安

全だよ、こいつは優しくしてくれるよみたいな心伝的なテレパシーがあるのかもしれない。ちょうど一年前だったか、玄関先にすつと立ち姿が美しいサギがいて来る日も来る日も朝の一時間ほど、托鉢僧みたいに来ていた。小魚などを与えようとしても一切口にせず、一心にこちらを見つめるだけで、全く動かなかった。そして一週間後ぱたつと倒れそれっきりだった。一体何を伝えたかったのだろうか……。

最近はどこかへ出掛けることも少なくなった。週に一度は居酒屋で飲んではいたが、鼻にしていた二軒の居酒屋も店主が高齢ということで、昨年店じまいをしてしまった。もう新しい店を開拓してまで飲みたいとは思わなくなった。どの店にも常連客というのがいて、その中に交じって愛想をするのも疲れるし、還暦すぎた頃からお酒の量もめっきり減ってしまった。でもお酒は飲みたい。居間で焼酎のお湯割りと総菜をつまみながらテレビを見る。もっぱらBSで、地上波はほとんど見ない。大概がガチャガチャした賑やかな番組が多く逆に滅入ってしまう。それに比べBSはまだいい。通販番組の多さには目を覆いたくなるが、世界の山や海、動物といった大自然をテーマにしたドキュメント番組や世界の町並みやそこに住む人達などの映像がどこかのチャンネルでやっていて、誘う風景や表情にどこかほっとする。もうひとつは世界のニュースである。離れた島国であるから仕方がないのか、取り上げるニュースや視点がいささか他国と違うような気がする。今のウクライナやガザを外せば、一貫してトップニュースに取り上げているのが、移民、難民問題である。日本では取り上げない。イギリスのEU離脱の大きな原因でもあったし、アメリカ大統領選挙でも主要な論点なのに。

中東や北アフリカでの紛争や内戦などを逃れ、海を渡ってヨーロッパにやってくる難民。多くの子どもたちが来る日も来る日も東地中海で溺死していく。それしか選択肢はないのか。見ていて苦しいがやはり見てしまう。海岸でうつ伏せになって横たわる幼児。この子たちにきつと明るい未来や将来はない。溺死した子には申し訳ないが、将来がない子ども

たちにとっては早く死を迎えられるのは幸せなのかもしれない。神が死んだってどこかの哲学者がいったが、神なんてもともといるはずがない。暴力が一番強く、それに人や世界はひれ伏すしかないのだ。核兵器をちらつかせる暴力の前では、周りは何もできないのだ。アンチテーゼとしてプーチンが神にさえ思えてくる時がある。悪魔という存在もともと神だったわけだから。だめだ、だめだ、少し酔いが回ってきたようだ。

チャンネルを変えようとしたところ、ガザの難民キャンプで、空中投下された物資が人々の上に落下している画面が映し出されていた。五人が死んだとのことである。ナレーションでは、物資を手に行けるものは力の強いもので、弱いものは手にできないと語っていた。画面を見て、私ははっとした。一昨日の光景と重なったのだ。初音の散歩の時であった。近くに乳が重たそうな雌犬がいてこちらを見ている。身体がガリガリだったので寄り乳のところが目立った。白くて優しい顔をしていた。ポケットから餌を手にしてあげた。近づいて口にしようとしたりと、離れていた雄犬二頭が走り寄ってきて、雌犬ははじかれて口でできず二頭の後ろに回った。あろうことか、その一頭が餌を食い終わって、雌犬の後ろに回って激しく交尾した。雌犬は為すがままであった。

珈琲業と動物でほぼ一日がつぶれる。美味しかったとまた珈琲豆を買いに、飲みにきてくれる。動物は餌を含めて愛情を与えれば、愛情で返してくれる。充実していると言えば、そうかもしれない。ただ気がかりなのは、周りにいる野良犬たちだ。全国的にどうだろうとよくスマホで検索するのだが、たくさん関連した写真や動画がアップされていく。時には残酷な画像も目にする。他方、真面目に犬猫に限らず多種の生き物の保護活動に参加している人や団体の多いこと。真似できないすごい人たちもいて感心するばかりだ。ただ、保護犬の活動されている組織といえども、野犬はほぼ対象外のような感じすらさえある。捕獲しても預かってもらえるところはなく、管理センターで一時期保護されるものの殆ど

が殺処分である。

ネットを通じていろいろ情報を求めていくと、そのうち連絡を取り合う人たちもできて、たいてい保護猫や保護犬を世話していて里親探しに奔走している。そんな中、熱心に保護活動していた四十代の女性であったが、文面で、すみません、もう限界です。キリがないです——とホームページでの案内を閉じていた。そういう心を折れた人達を短い期間だったが幾度と見た。個人でやり続けるにはどうしても限界があるのだ。

駐車場に黄色い原付スクーターが入ってきた。店にたまに来てくれる客の一人、谷山美香さんだ。サツキを知って店に来てくれるようになった。二十半ばで、近くのペットショップに勤めている。以前は犬・猫ふれあいテーマパークで働いていたという。かなり前にそのテーマパークは潰れて、転々として今のペットショップに至っている。ずっと動物相手の仕事だったようだ。どちらかというと内向的な性格で、自ら積極的に話すというタイプの女性ではない。しかし大胆な行動にでることも。にこっとした笑顔も、どこか悲しげに見えてくる。

「少しは、元気になった？」

「ええ。いろいろご迷惑おかけしてしまって」

ぺこっと頭を下げて、はにかんだ。そして、また深く頭を下げた。

「全然気にしないで、美香さんの気持ちはよくわかってるから。今でも、同じ所で働いているの？」

「はい」

明るい声で、少しは元気を取り戻したようであった。

一カ月前のことだった。美香さんは席に着くなり、ふさぎこんでいた。どうしたの？と聞くと、彼女はぼつりぼつりと仕事のことをしゃべりはじめた。ケージ内の動物たちには、餌を十分に与えてはいけないと言う。それは大きく育つことを極力抑えるためと、糞の処

理を少なくするために。そして大きくなって売れ残ったら、闇の所へ売り飛ばされてしま
うと――。

「ペットショップで飼われているあの仔たちを逃がしてあげたいんです」と、ガラス窓の
一点を見つめるように谷山美香は言った。

「逃がす？」

不意な彼女の言葉に、一瞬何を言っているのだろうと思ったが、すぐに理解ができた。

彼女はこちらを向いて、半分涙目で口をキリッと一文字に結んだ。

犯罪で罪を負わなければならないこと。逮捕されて世間に晒されること。美香は確信犯
だから仕方がないが、彼女の家族や周りの人たちのこと。損害賠償のこと。それよりも逃
がした仔犬や子猫たちのこと……二十半ばの大の大人に言うのは憚れたことではあったが、
彼女の横に座って話した。どんな商売でも闇の部分はある。とくに動物相手はそうだろう。
動物が好きで好きでたまらない彼女にとって、精一杯の抵抗なのだ。

「手伝おうか」と私は言った。彼女は「えっ」と驚きの顔を見せて、「本当ですか、一緒
にやってくれるんですか」笑みがこぼれた。「もちろん」と私は言った。

数日後の深夜、ペットショップの前の駐車場に車を停めた。ここは複合施設のひとつで、
24時間営業の店などもあり、外灯は煌々としていて、人も少なからずいた。約束の時
間になっても彼女は来ない。十分、三十分と時間は過ぎていく。こちらからは連絡を入れ
るつもりはなかった。外灯の下で、数人の若い連中がバイクの周りで煙草を吸ったり、缶
飲料を飲んだりと騒いでいる。

スマートフォンが鳴った。彼女からだ。しばらく無言であった。

「待ってるんだけど」と私は言った。

「……すみません……本当にすみません……」息を詰まらせながら、か細い声が聞こえて
きた。

「怖気付いた？」

「……すみません。怖くなってしまって、震えが止まらなくなっ

外灯の下にいる彼らは、アクセルを回したり、クラクションを鳴らしたりと騒ぎはじめている。この寒い中、何が楽しいのか、飲んで笑って、奇声を上げたりしている。

「良かった。それでいいんだよ」

「えっ」

「止めた方がいいに決まっている。あの子らをケージから逃がしても、きっと逃げないと思うんだ。まだ幼いし、生まれながらその世界に生きているから、外の世界なんかわかるはずないと思うよ。屋外へ持ち出すにしても、目をパチクリさせて戸惑うばかりだよ、きつと。この寒さの中、下手すら死んじゃうよ。車にひかれるかもしれないし」

「……」

「どこかへ逃げたりとか、誰かに持ってかれたりとか、見つかってもしその子らって商品価値どうなのかな。というより、あの仔たち幸せかな」

しばらく私たちは黙っていた。そのうち若い連中もいなくなっていた。外灯に映し消された光景は、誰かが彼らを連れ去ったような感じであった。

「ゆっくり休んで、お休み。電話切るよ」

「お休みなさい」

エンジンを掛け、車を出す。外灯の下には空き缶や紙くずが捨ててあり、まるで動かない小動物に見えた。

出された水を口にして「ひとつ聞いてもいいですか？」と彼女は言った。

「はい」

「増田さんは、最初からやらないつもりだったんですか？」

「まあ、そうかな。何一つ報われない感じがしてき。美香さんやあの仔らにとっても。美

香さんが来ないとわかって、正直どこかほっとしていたんだ」

私は適当な言葉が見つからず、そう言った。「ところで面白いコーヒーがあるんだ。今から淹れるから是非飲んでみて」私は数日前に焙煎したコーヒー豆を挽き、ドリップでゆっくり淹れた。

「美味しい！　なんか酸味や苦みもあって、確かに渋みもあたりして、香りも強くて、なんだろう……これ。どこか懐かしきもあって、私はここにいるよって感じの味がします」

「美香さんは、いい表現するね。実はこれ、欠点豆を集めたコーヒーなんだ」

「欠点豆？　はじめて聞きます」

私は保存缶から生の欠点豆をテーブルに出す。

「黒いのや白いの青みがあったの、皺くちゃの、小さい穴が開いたの、貝殻みたいなものも」

彼女は一つひとつの豆を手にとって、匂いを嗅いでみる。

「コーヒーの生豆には、どうしても悪い豆も入ってくるんだ。穴のあるのは虫食い豆だね、これは発酵したものと、これはカビかな、貝殻って言ってたけど、中身がえぐられていて、美香さんの言葉通り貝殻豆と言うんだよ。これらは焙煎の前に、ピッキングと言って欠点豆を除去する作業があるんだ。すっきりした美味しいコーヒーを提供するためにね」

「でも、味わいがあって美味しかったですけど」

「そうなんだ。雑味というけどね、甘味であったり、苦みであったり、それも素朴さであり個性なんだ。すっきりしたのは、どこか物足りない感じもあるしね」

「人間もそうですよね」

彼女は一口、二口と味わった。

「いや、犬猫や他の動物だって同じだと思うな」

*

三月に入った。寒の戻りで、この数日は雪も降って、田畑は白一色の世界だった。最近気になる一頭の野良犬がいる。群れをつくらず、いつも一頭。黒にまだらな白。立ち耳できりっとした表情が甲斐犬に似ている。おそらく雄犬だろう。サツキのように野良として生まれてきてはいないように見えた。甲斐犬であれば買主に忠誠心が強く、逃げるとは考えづらい。何らかの事情で捨てられたのか。散歩の途中に彼に餌をやる。最初の頃は警戒心が強くて、食べることもそうだが、なかなか近づこうともしない。外は氷点下、雪降る中いつも同じ場所で微動だにせず、こちらをじっと見ている。数日もすると、甲斐犬もそこしは警戒心を解いてくれたか、そろそろと近づき餌を口にする、それから毎日、散歩の時間が一時間遅れてもずっと待っていた。サツキや初音も吠えず、警戒心はないようでもある。辛抱強さと、健気さ、忠実心——この犬なら飼ってあげてもいいかな、と心がよぎる。駄目だ駄目だと頭を振る。

ある朝、サツキと散歩をしているとき、道の傍らに車二台が停まっていた。田畑の中に甲斐犬と男が二人、道にも男が一人いた。ターゲットは甲斐犬らしく、三人の視線はその犬に注がれていた。捕獲であることはすぐわかった。犬は狭い範囲内で周囲をくるくる回っていた。

私は道にいた男性に声を掛けた。作業着の胸には、A県動物管理センターのネームが入っていた。彼は作業中にも関らず、丁寧に対応してくれた。町民からの連絡が何件かあつて度々来ているとのこと、今日は田畑にいる黒い犬と神社の竹やぶにいる二、三頭の野犬の捕獲を目指しているという。餌の中に強いしびれの出る薬を混入して動けないのを待っている最中だと言う。

「捕獲できそうですか？」

「おそらくできます。もうすこしたら、しびれで立てなくなります。最終手段のやりかたです」

「捕獲した後、この犬はどうなるんですか？」

「センターで一定の期間預かることとなります」

「その後、殺処分されるんですね」

「――」

男は頷いた

「この黒い犬、譲渡していただくこと可能ですか？」

「できません。保護犬とちがって野犬は百パーセント無理です。育てられません。とくに成犬は」

「何とかしてあげたいのです。私の連絡先です」

私は食い下がるように、財布の中に入れてあった店の名刺を彼に渡した。

彼は嫌がる顔もせず「わかりました」と受け取ってくれた。

しかしその後向こうから何の連絡もない。それは、なくて当然であったし、私も何ら期待はしなかった。否、連絡が来ないことを期待していたのかもしれない。そして私からも連絡はしなかった。譲り受けることができないのであれば、殺処分の報告を聞かされるだけである。ただ、あの日、私を待っていた甲斐犬が、いつもの場所にいたために捕獲されてしまったことが目を追うごとにかわいそうで悔やまれる。と同時に変にどこかほっとした自分もいることもたしかであった。

三月中旬に、例年の田畑周辺の川掃除があった。農家と地権者の二十人くらいが集まったの草刈りや川の中の清掃作業である。私も小さな田畑の地権者であって、近くの農家さ

んに貸している。

その夜は、神社の社務所を借りての久しぶりの懇親会があった。大体が四十から七十代の氏子や門徒仲間でもある昔からの気心知れた間柄である。出てくる話題も他愛もないことから、天候や農作物、新しいトラクターの共同購入についてのいつも代わり映えのしない話ばかりである。ただし、皆それぞれの家のあれやこれやの話は一切しない。いい話にしてもそうだ。いい話は、どこかで嫉妬が生まれる。長く付き合っていく上での処世術というか配慮である。皆ここで生まれた三、四代目で、叩けばホコリの出ない人は存在しないと同様に、長く住んでいれば、どんな家にだって周囲にそれなりの迷惑をかけたことやお世話になったことなども百も承知でお互い個別の厄介ことにはあまり干渉するどころか触れたがらない。こういう歩みが濃厚な人間関係を作っていく。たかが犬が吠えたくらいでは何にも言わないのだ。

「最近、家から靴やつっかけがなくなるんや」と誰からか声上がる。それにつられて「うちもそうや」と二、三声が被さってきた。「うちなんか、息子の海外ブランドのスपोर्टシューズ片方だけ盗まれたんよ」と続く。私ははっとして、家のキツネのことが脳裏をよぎった。すると「動物の仕業やな。きっとキツネかタヌキの仕業やろ」と違う人から聞こえてきた。話が大きくなりそうだ。私はうつむきながら、目の前の柿の種の小袋を開け、話の様子を窺った。家の床下、裏前栽を根城にしているキツネたちに間違いない。裏前栽のあちこちに、いくつかのペットボトルや靴、スリッパ、靴下などが散乱していた。アデイダスのロゴが入った高そうな靴もあったように思う。明日にでも周りに気づかれないうちに片づけないと。燃えないゴミ袋は透明だから、すぐわかってしまう。袋には何が捨ててあるかをわかるようにしてくださいというようなことが書かれていたような。となると、遠い人里離れたところでも捨てに行くしかないか。とはいえ、キツネは家の床下の棲家としているものの、とくに夜はいろんな場所に出没しているため場所の特定も難しく、

もし家で見つかったとしても私の家だけの責任ともいえないであろう。野生動物もこうして人間と共存していかなければならないのだ。それにしても、靴やスリッパなどを好き好んで盗んでいくのか。外に干してあるのならわかるが、聞けば三和土か下足箱にあるという。どうも玄関ドアを開けて失敬するようである。

私は胡坐でうつむきながらビールと柿の種を口に放り込みながらキツネことをあれこれ考えていると、野犬という言葉が耳に入ってきた。話はどうやら田畑にいる野良犬のことに移っているようだった。

「餌付けしている人もおるからな。竹やぶの中に市が捕獲器をいくつか仕掛けてはいるけど、全然や。とくに成犬は引つ掛かりもせん。この前は代わりにタヌキが掛かっていたわ」
「登下校の子どもたちが咬まれたら大変ですよ。万が一狂犬病になったら、死に至りますから」「誰が責任とるんかな。捨てた者が一番悪いけど、放置していた市や県？ 自治会？」「市の動きも遅い。ま、動物愛護団体がうるさいのはわかるけど」

農家でない年配者から酔った勢いで「逆に犬たちに感謝せなあかんよ。犬が糞をしてくれるから肥料もいらんし、大助かりやないの。昔はここにいく多くはこえもち(★、、、)しとったくらいやで。ワシもやってたけど、近所の便槽を借りてまでやらされたな。長い柄杓ですくって、天秤棒で糞尿を担いで、畑に撒いてたな。それで、畑に行くまでに道にこぼすんよな、足にかかって。臭かったなあ、風呂に入っても体に染みついた糞尿の臭いはなかなかとれんし、あの臭いは死んでも忘れん。よくやってたなあ」周りからどっと笑いが起こって、こえもちの話でもちきりだ。この私も経験があって、あの臭いは今でも忘れない。笑いが最高潮の中、私は不愉快の度を高めていった。懇親会という場だけに、冷めた話を持ち出すことは憚れるにせよ、野良犬の立場での話がすこしも出てこないのが不満であった。犬たちを処分するという意見もあっていい。ただここにいく多くは無関心であるということだ。場を冷静に考えれば、私のほうがどうかしているのかもしれない。し

かし彼らの笑いが許せなかった。

それでも私はそれらの話に耳を傾けながら、一人の男に視線をやった。彼は、列の隅っこの方で話を聞き流すように静かにビールを飲んでいた。水を飲むかのように、すでに彼の前には数本のビール瓶があった。地黒のせいもあって、ほとんど顔にでない。今も顔は笑っているが、目が笑っていない。西口良太。歳は五十前後で、仕事は土建業を営む。二代目で、父は十年前に亡くなり、今は奥さんと母、娘、息子、チワワと一緒に暮らしている。西口家として六十年前にこの町にやってきたようで、この集まりの衆としては新参者である。もちろん氏子や門徒には入っておらず、聞くところによるとよく知られた新興宗教に入っていると聞く。私との接点は、父母の代から引き継ぐ土地を西口家へ作業場として貸している間柄にある。

母は、ずっと西口家のことをうさん臭く思っていた。良太の父には二人の兄弟がいたとのこと。その親族の関係はいささか複雑であったようで、女の出入りも多く、あちこちの子をばら撒いてきたとも聞く。私が子供の頃登下校の際に作業場近くを通ると、たまにパトカーが停まっていたこともあった。おいちよかぶと呼ばれる賭博であった。母はいつも良太の父から景気の話聞かされる度、ちゃんと家賃を払ってもらえるか気が気でなかったようだ。釣りの帰りの際に大きな生きた海の魚をもらったり、なかなか食べられないという赤犬の肉を持ってきたこともあったという。母は断れず、魚は川に逃がし、赤犬の肉は捨てた。

今、私がなぜ彼に視線をやったか、それには理由がある。彼の父が犬殺しや猫殺しをやっていたという話を母から聞いたことがあるからだ。好き好んでやっているわけではなく、何かの理由で誰かに頼まれてのことであろう。私も実家を離れていた時期が二十年もあって、その辺りの事情はよく分からない。ただどこかの法事の際に、野良猫が増えてきたという話の中で、良太の父は、猫捕りしようか、わしに任せたらやったるで、と自慢げに酒

を飲みながら話していたことを私も記憶している。

誰が犬殺し、猫殺しを頼んだか。一番に迷惑している者といえば、やはり田畑を持って
いる農家ではなからうか。ここにいる衆の先代たち、当事者もこの場にいるかもしれない。
あと考えるとしたら、とにかく犬猫を害としかみていない人間である。そういえばサツキ
の記事が掲載した折、新聞社に好意的な投稿や連絡があったものの、中には何で助けた、
害やから殺してしまえという抗議もすくなくあつたと聞く。

市などに頼んでも時間はかかるし、埒が明かない。理由はそんなところだ。良太は父と
違って静かでもあり、一面粗野な感じも見受けられる。彼は、犬殺し、猫殺しを引き継い
でやっているのだろうか。朝夕、チワワの散歩姿の彼をよく見かける。ガタイも大きく無
骨な身なりで闊歩する彼に、ちよこちよこについていくチワワの姿が微笑ましいぐらい
だ。

会がお開きになり、皆家路に向かう。家が同じ方向にあつて、西口良太と並んで帰る。
外は雨や雪が降ってはいないものの、底冷えの寒さであった。私たちは背中を丸めて早歩
きしながら、お互い挨拶がてら商売のことなどを話した。

「野良犬が増えてきましたね」

良太は私の考えていることを察するかのようにさらっと言った。

「何とかならんもんですかね。棄てる奴の顔が見てみたい」

「増田さん、本当に動物好きなんですよ。野良たちに餌付けされてるでしょ」

「えっ」

一瞬立ち止まりそうになり、彼の方を向いた。

「すみません。いらんこと喋っちゃって。僕、野良たちの行動をよく観察してるんです

ト

「観察？」

「増田さん、懇親会でずっと僕の方を見ていたでしょ。きっと、野良犬のことかなって思
って」彼は私の方を向き、また真つすぐ向き直った。「僕、自分で言うのも何ですが、け
っこう勘が働くんですよ。こう見えても」

彼の作業場が見えてきて、すこし座りませんかと言った。公園にあるような木のベンチ
横に自動販売機がある。前は真つ暗闇の田畑が広がっている。私はベンチに腰かけて後ろ
を見た。奥にはダンプと小型コンボ、足場板が縦にきれい並べられていた。個人の建設屋
というのは大体においての資材や廃棄物が散らかっているものだが、すっきりと整頓され
ていた。

「何か飲まれる？」

私は手を左右にして「ええわ」と断った。

「珈琲屋さんに缶コーヒーをすすめるのも申し訳ないが、でも体を温めてください。冷え
ますから」

「それでは、頂くかな。ありがとう」と言っ、熱い微糖の缶コーヒーを受け取った。

西口良太も隣に座った。彼は缶コーヒーのタブを抜き、ぐいっとコーヒーを飲んだ。

「増田さんって、たしか飼われているのがトイプードルと例の保護犬でしたっけ。お母さ
んも犬好きでしたよね。よくこの辺りにも散歩に連れていました」

「振り返ってみると、ずっと子供の頃から犬が傍にいたなって。もう何匹飼ったのかな。
犬の寿命ってせいぜい十年から十五年くらいじゃないですか。人間の寿命に合わせてつく
られた動物なんだなとつくづく思うな」

「家も今のチワワで三代目ですが、家族同然で、欠かせない存在です」

「ところで、先ほど、観察してらって」

「野良犬のことですよ、時間があれば、彼らの様子を見ています。ある行為のために」
彼はすこし間を置きこちらを向いて「間違っていたら、すみません。野良犬の処分のこと

について知りたがっているのかなって」

大事なことを、最初にずばつと言う。彼の性格や生き方の一端が見えたような気がした。

沈黙。

十秒くらいして、「野犬の話の際、増田さんの顔にそう書いているように見えて。違いますか？」

私は頷き「聞かせて頂けるかな、その処分について」と言った。

「聞いてどうされるんですか？ 聞くだけではないですよ、きつと」

いいでしょう、と語りはじめた。でも難しい話でもないんです。ただ、何頭か捕獲して一か所に集めて灯油をかけて燃やすだけなのです。少ない時で五頭、多い時で十頭くらいでしょうか。やっている行為は犯罪ではあることは承知しています。当時親父がやっていて、手伝わなくてもいいと何度も言われました。もちろん最初の頃抵抗はあったんですが、そのうち依頼があれば、積極的ではなかったのですが、心の持ちようですかね、重ねてやっていると、決して消極的ではなかったように思います。野良犬たちのため早く安堵の世界に連れて行ったほうが、むしろ幸せかなって気持ちを切り替えていったんでしょうね、自分で。彼らにはこれっぽっちの未来がないのです。彼らの目を見たことがありますか？ 彼らに言うんです、早く楽にさせてあげるからなど。私も犬を飼っていて、犬を愛しているひとりです。人間の身勝手に捨てられた彼らには何の罪もありません。でも私がやらなければ、誰がやるんですか。その部分で罪を背負ってやっている覚悟は持っています。それは親父も同じだったと思います」

「今でも依頼はあるの？」

「ごくまれに頼まれます。親父が亡くなって十年経ちますが、めっきり減りました。時代も変わって、やりづらくなっているのも事実です。でもこんなこと、やる必要が無ければ

「面白いんですけど」

「もうひとつ聞きづらいんだけど、家族は知っているの？」

「母や妻は知っています。子供もおそらくわかっていると思います。このことには、誰も一切口にはしません」

しばらく沈黙は続き、私たちは何を見るときもなく、闇に覆われた目の前の田畑を見ていた。まるで黒い海のようなのである。はるか向こうにあるポツンとある外灯が灯台のように見えた。私は、海を渡ってヨーロッパにやってくる難民、海岸でうつ伏せになくなって横たわる幼児のことを思い出し、田畑に溺れる犬たちを想像してみた。

「もし……もし私が依頼させてもらうということもできるのかな」

黒い海に浮かぶ自分の姿を思い浮かべながら言った。

西口良太はじつと私の顔を見て「できますか？」と言い「いいですが……でも、よく考えられたほうがいいかと」彼は黒くなった田畑に視線を移し「増田さんの心中はよくわかっているつもりです。きっと僕と同じじゃないかって。もしかして先ほどの懇親会で何か感じられたのでは」

私は喋らず、ただ目の前の黒い海をじつと見ていた。

彼は来週以降の天気の良い日がいいと言った。「夜中か夜明け前くらいの間で、風雨が強い日にやります」

私たちは報酬やいくつかの段取りを話し合った。彼は私の依頼は受けるが、現場には立ち会わせないと言った。自分ひとりでやると言う。今までそうやってきたんだと。

「それは出来ない。私が無責任すぎる、最後まで見届けなければならぬ」と私は頭を振った。「私自身も罪を背負わせてもらわないと」

「そうでしょうか」彼は背筋を伸ばし見下ろすように言った。「増田さんの気持ちはよくわかります。でも、悪や罪というものをあえて自ら作っているようにしか思えないんです

が。なんて言うのかなあ、学がないから上手く言えないのですが、そうすることによって、世の中の悪に対して怒る必要性もなくなるし、むしろ自分が損害を与えていると思ひ込む方が心理的にずっと楽だと思ふんですよ」

私ははっとさせられた。何も言葉が出てこなかった。

「偉そぶった言い方して、すみません。親父もあんな人間だったし、いろいろ考えさせることもあつて。不思議とこの作業から教えてもらうことも、たくさんあります」彼は苦笑いをして「現場まで来て頂くことは構いませんが、それからはお引き取り頂くことでどうですか」

「わかりました」

私たちはベンチから腰を上げた。彼は振り向きざまに「よく考えてください」と頭を下げた。

二週間後に西口良太からFaxが届いた。明日の午前四時に来てください。捕獲した犬は八頭、一頭一万で計八万円の報酬とあつた。場所は河川敷近くの小高い丘で簡単な手書きの地図も書かれていた。いきなり来られても暗くてわからないと思われるので、日中下見されたしと記されていた。

二週間に、八頭の野良犬。たしかにこの一週間、野良犬は一頭も見掛けなかった。どうやって捕獲したのか不思議である。注意深く田畑を見ていたつもりだったが、人の寝静まったときに手際よくやったのだろうか。犬の鳴き声も全く聞こえなかった。それにしても竹やぶを根城にしていたのが八頭もいたのだろうか、他の地域の犬も入っているのか、万が一仔犬が入っていれば外してもらおう……。依頼主というのも正直変な気分だ。いろいろなことが気になって手につかない。私の心情や彼らの未来はどうであれ、手は下さず依頼だけで八頭の犬が焼かれて死んでしまう。なんと欺瞞に満ちた人間なんだろう、この私

って奴は——。二週間前のあの高揚した気持ち、ふわふわとした浮足立つ感じになってしまっている。私はこの期間考えに考え抜いた。あの懇親会でのあの笑い、無関心さ、うさせたのか。いいや、たかがあるぐらいで衝動的に動かされる自分ではないはずだ。自分がどれだけ善になれるかを理解するために、自分をどれだけ悪にするかを理解しなければならぬってことか、何をたわけたことを考えているんだ、殺処分される犬たちには何も関係ないじゃないか！ 傍らのA新聞を手にした。一面に「ガザ、深まる絶望」と大きく見出しがあって、空爆で亡くなった、在りし日の可愛い女の子の写真が載っていた。避難民が身を寄せる場所で、現地の通信員が報告している。「イスラエル軍は早く殺しに来てくれないだろうか」「長い時間、恐怖を与えられ、死んでいくことに耐えられない」そんな声が目立ち始め、近くの電線には、爆風で吹き飛ばされた子どもたちの遺体がぶらさがっていた。締めくくりに、希望を捨てず、そう祈り続けることは、もう難しいと——。アインシュタインとフロイトの往復書簡のなかでも、人間は憎悪に駆られた相手を絶滅させるという「破壊欲動がある」という点で二人の考えは一致している。フロイトは人間を行動に駆り立てる内在的な「欲動」には、生物の本能的な憎悪と破壊の「死の欲動」と、生存本能や愛する者への絆、戦争への憤りなど「生への欲動」の二つがあり、時に自己保身が攻撃に転じるように両者は互いに作用すると——。私は二人の天才が語る人間の本質を反芻する。

寝しなに初音とサツキにお休みのあいさつをする。安心しきった初音の寝顔に比べ、サツキは目を開けたまま寝ている。いつもではないが瞼に目の絵を描いたような健気な表情である。すぐ逃げられるよう野良の血筋を受け継いでいるのだ。溺れ死を免れ大病の大手術に成功したサツキを前に、よく頑張ったなと頭を撫でてやる。これだけ一所懸命に尽くしたことして、未だかつてなかったように思う。それも野良の犬のために。仕事とは違って、無私の心というものだったのかもしれない。サツキの匂いを嗅ぐとあの欠点豆と同じ

ように、懐かしい思い出に浸ることができる。

子供の頃から私の傍にはいつも犬がいた。母が動物好きということもあって、どれだけの犬を飼ってきたのだろう、一匹一匹顔と名前を思い返してみる。四、五匹は飼っていたか。どういうわけだか、子供の頃に飼っていた犬のことをより鮮明に覚えていた。子供の時分は、味噌汁ご飯だけで、雪の降る凍てつく日もかんかん照りの暑い日も外の粗末な小屋で飼ってきた。寒くて凍え死にした犬もいた。動物病院はすくなくならずあったのかもしれないが、病気や怪我をしても連れて行くという発想すらなかった。でももうすこし、子供ながらに何かできたこともあったのではないかと悔やまれる。

私は河川敷近くの小高い丘の場所へ下見に出掛けた。車で十五分くらいの所だろうか。河川敷の法面が上がっていくと鬱蒼とした木々が現れ、その中を潜っていくような場所である。日中でも車の往来はすくないように思えた。しばらく走ると川と反対側にその小高い丘があった。案内看板がひとつもなく、普通なら見過ごしてしまう所であった。脇道の坂を数十メートル上がっていくと関係者以外立入禁止のバリケードがあった。この丘の上がその場所なのだ。ここだったら民家もないし、犬の鳴き声や臭いも気にならなくて済みそうだ。普段は産業廃棄物処理場とかに使っているような場所に思えた。窓からは鉛色の空が濃くなって雲の動きも早くなってきたように見えた。

夜になると風雨が強くなってきた。河川敷の法面に差し掛かると、私の進入を拒むように周りの木々が暴れはじめていた。フロントガラスには飛び散った葉っぱや小枝が張り付いてきた。ワイパーを動かすも、ひっきりなしにべたつと張り付いてくる。脇道の坂道を上がっていくとバリケードは外されていた。さらに進んでいくと、一層風雨が激しくなってきた。ヘッドライトをハイビームにして目の前に何か飛んでこないか注視してゆっくと加減しながらアクセルペダルを踏んでいく。

オレンジ色の明かりが上の方から見えてきた。さらにゆっくり進むと切り開かれた場所に着いた。オレンジ色の外灯が周囲にあって、浮かび上がるように銀色の建物が大小二つ建っていた。その横には砂利の山とローラーとユンボの重機、ダンプ、軽トラがあった。ここは廃棄場所というより資材置き場なのか、作業所同様にきれいに片付けられていた。風雨で外に出られる状況ではなく、車を資材置き場の近くまでやって、西口良太を車の中で待った。オレンジの世界に、空気の渦をつくりながら鳴り叫ぶ風の音、渦は風が吹いている限り、どんどん生まれては消え、その繰り返しで電線に触れ、木々に当たりビュービューと風の音を作っていく。今この瞬間彼らを焼いているんだと直感的に思った。おそらく二つの建物の一つが焼却炉になっているのだろう。大きく息をしながら、目を閉じることなく、目の前の光景を見続けなければならないと思った。私の依頼で、八頭の野良犬は焼き殺されていく。もしかしたら、あの甲斐犬も捕獲人の手から抜け出してここにいたのだろうか、そしてあの重たい乳のガリガリの雌犬も含まれていたのだろうか。

二つの建物の間から、合羽姿の西口良太が現れた。私はフロントドアガラスを下して、彼を待った。ゆっくりとした足取りは、今しがた爆弾を落としてきたような兵士のように見えた。

「間もなく焼き終わります」火夫のような淡々とした口調だった。

彼は小さい施設の上の方に眼をやった。上部に煙突らしき突出物があって、そこから見えるか見えないか程度の白い煙が細い線になって風の渦に巻き込まれていく。犬の鳴き声は一切風の音で消されていた。彼はこのタイミングを狙っていたに違いない。私は封筒に入れた報酬額を彼に渡した。彼は礼をして、それを懐に入れた。

「もう、お引き取りください。何もありませんから」

彼は踵を返し、建物の方へ戻っていった。素っ気ない対応だと感じたが、冷静に考えれば至極当然である。私が無理にここへ来たのだ。

私はもうすこしこの場所に留まらなくてはいけないと感じた。すべての煙が消え去るまでは。それが私にできる最低限の礼儀だと思えた。

しばらくすると風雨が収まり辺りは静寂になった。暴れていた木々も嘘のように静かになり、煙突からでる煙も無かった。私はその場所を離れ法面下の脇の場所に車を停めた。時計を見ると五時半を指していた。シートを倒ししばし眼を閉じた。すると突然のどの渴きを覚えた。昨夜買ってあった一リットルのペットボトルの水をごくごく最後まで飲み干してしまった。私の中に八頭の犬がいる、そう思った。渴きはなかなかおさまらなかった。空気を吸い込めない感じがあって、大きく息をした。すると今度は尿意を催し、車を出てこれでもかというくらい大量のおしっこをした。

東の空が白んできたと同時に、一面霧が流れ込んできた。ライトを点け車を発進させた。やけに帰り道が遠く感じた。うとうととしていたのであろうか、対向車と出合ったのか出合わなかったのかさえもわからず、まるで雲の中を走っているような感覚だった。

神社の竹やぶや辺りの田畑にも霧が覆い被さっていて、その姿を隠していた。すこしの間、車を停めた。どこからか犬たちが走り寄ってくるような、それも一頭ではなく、二頭、三頭と……。すぐに吠え始めるような感じがしたので、ここに留まってはいけないと車を発車させた。間もなく霧が晴れる。初音やサツキ、猫たちが私の帰りを待っている。無性にあの仔たちを正面からぎゅっと抱きしめたくなくなった。昨日作った鶏むねのハムをご褒美に多めにやろう。キツネ親子は食べるかなとか考えつつ、アクセルを強く踏んだ。

了

（参考資料：2024年4月7日付 朝日新聞、「ひととはなぜ戦争をするのか」講談社学術文庫）